

わら回中央委員会の招集に關する政治局の決定

同盟政治局は12月1日、2日にわら回中央委員を招集する。
わら回中央委員会の中心的議題は「同盟わら回大会を勝ちとるために」である。

A 同盟わら回大会を勝ちとるために

(一) 10・21斗争が向われたものは、①国際階級斗争（ベトナム解放斗争の勝利的前進、フランス五月、アメリカ黒人暴動と反戦斗争、日本の安保打倒—自衛隊打倒—打倒斗争）と追いつめられた帝国内諸列強の権力政体の転換と国際反革命—侵略政策の反攻への転換期に、日本階級斗争を突破口として69年国際階級斗争を自衛隊打倒—打倒を主軸として国際反帝斗争の昂揚へとしかに情勢を切り開くのかという課題と、② その国際的任務を貫徹するために、いかにして70年安保斗争を世界革命への永続的展望を切り開くかとして斗争を拓くのかという二つの課題であった。

したがって、10・21斗争の総括が導き出されるべき展望は当然、国際階級斗争の転換期に立つ日本階級斗争の一大焦点として70年安保斗争を、日本革命の型と道すべしを確定する方向において世界革命戦争への永続的展望を切り開く革命論的位置において確定しなければならぬのである。

しかし、革命党派における政治理論—政治路線は、実践的党主体が切り開きたどった現在の位置と現実の階級を抜きにして、即ち、過去の主体的諸斗争の全局面の実践的継承を抜きにして未来への展望を立てるものではない。われわれは、党八回大会において、六九年初頭にかけられたものであるが、権力の組織破壊を狙う弾圧にわが同盟を非合法と追い込まんとする弾圧に耐え抜き、革命への永続的斗争を能動的に拡大しうる強固な党組織をスロレタリアの党として構築しなければならぬ。そのためには、年内に全党の一九六八年階級斗争の総括に關する強固な意志の一致を勝ちとり、日本革命への道すべしに対する確信を固めて一、三月斗争を突破し、六九年階級斗争を切り拓くのではないかと、七〇年斗争を担いうるスロレタリアートの前進黨を中央指導体制の確立をもちつつ固め、青年同盟、社學同を骨組とする地区反戦と全学連を強固につち固めよう。

(二) わら回中央委員会の討論は次のような基準を要求されるであろう

一、一月から三月して突きつけられている七〇年安保斗争前段の決定的局面において、主体的実践的にいかに応えるか、その明確な位置づけと全党的意図

の一致、そのための組織体制、指導体制の確立が急務となつてゐる。

ロ、この階級斗争の要請にこたえるためには、七〇年安保斗争を反帝斗争の一大焦点として斗争を拓きスロレタリア世界革命の永続的展望を切り開くための戦略的原則的意志統一が必すとされるであろう。即ち、日本革命の型と道すべしについての基本的意志統一抜きには、七〇年安保は勿論、一、三月斗争は切り開ける性格のものではない。

ハ、しかし、政治党派における革命戦略論の確立は、実践的党派が過去に提出し指導した政治路線と、その政治路線に導かれた斗争の総合的実勢とを抜きにしてはありえない。したがって討論は当然、④七回大会決定 ⑤二、三、就中四中決定 ⑥八、三政治局論文等有關諸論文を基軸としたものでなければならぬ。

(三) 五中委の内容は、七回大会以降、六八年階級斗争（10・21斗争を頂点とする）の全面的総括となるものであり、また、その全面的総括をふまえた七〇年階級斗争の就中一、三月斗争路線と体制を確立である以上、その獲得された内容は、全同盟に普及され、組織の末端まで意識化され、血肉化されなければならぬであろう。10・21斗争以後修身的に強められた官憲の弾圧をばぬのり、六九、七〇年の斗争を例え非合法化においても斗争を拓くためには年内に同盟八回大会を勝ちとらなければならぬ。

青年同盟建設に着手せよ

10・8以降、10・21にいたる安保粉砕・全人民的政治斗争の革命的地平を切開いてきた我々同盟は、一月より始まる革命的激動の全過程を領導する党体制の一環として、青年同盟建設の任に着手を開始した。

ヤ七回大会で決定した七〇年代階級斗争、武装蜂起を準備する党の建設に向けての沖一步戦積極週刊化、地区党建設は今秋を以てその基礎工事を確立し、軍事委、青年同盟建設の段階に入らなくてはならぬ。

いつまでもなく、青年同盟の建設は、いかにゆるぎなく、実隊云々なるその軍事技能の問題としてではなく、全同的政治斗争、全人民的政治斗争を担う、党の先進的大衆（活動家）―大衆との系列における、先進的大衆、活動家の組織形態の問題として存在している。日本においても、それは、共産党―民共、社会党―社青同、革共同（中核）―マル青労同、解放派―行動委員会（尤も解放派の結合には彼ら自身も、活動家―先進的大衆組織にほかならないのである）、ML同盟―解放戦線として現存している。

われわれが、BUND―青年同盟なる系列を組織することは、従っていかにゆるぎなくなる次元の問題としてではなく、BUNDそのものが目指すところの、階級斗争の相違、革命の型、党の型、そのものに規定されるのである。

60年以降われわれは、この党―先進的大衆の相違に対し、労研、社研、労働者政治組織等を以て対応したのが、階級情勢の面、革命の型そのものの規定にちとづいたものであるとするものならば、われわれは、その概括と、階級斗争の相違、革命の型なるものの、現在の認識の統一をそのまず第一の前提としなくてはならない。その上に立って、地区党―地区反戦―産別等の組織機能の確定を行っていかねばならないのである。

階級斗争も、一日か十年にも値するような時代を迎え、ポリシェヴィキが一九〇五年に初めて労働者大衆にその物質的基礎を確立することが成功したのと同じような革命的危機の時代を、戦后革命の取っ手初め日本においておこなえようとしている今、武装蜂起への接近と圧倒的労働者階級の党的結集の両者の重要な環となるであろうこの青年同盟建設へむけての討議と実践的着手の開始を呼ぶかける。

(一)

レーニンの一切の全人民的政治斗争―武装蜂起へむけた斗争論、組織論と、60年安保以降、革命的左翼が、労研、社研なり、労働者同盟なりとして、め

ざした階級的労働運動の相違とは明らかに異なる内容として存在している。

中核派の三全総―日本型社民の特異な斗争性を取場斗争に求め、その延長―階級と組織戦術の精鋭化を求めたのであった。（なから革マル派との党派斗争の一つであった産別対地区党路線を全人民的政治斗争を担うものとしての地区党としてではなく、党派の闘い込み運動の方法論的相違にすぎない。）

三菱長船社研の運動をまた戦局的取場斗争論に目かならず、大阪中電における、その取場自己権力論も、中核、長船社研の路線の純化としてあり、産別マル青は設定された。且つまた、革命的には、口に出さずとも市民社会と政治的団家の分離、グラウンディングの「山塚は動揺しても市民社会は堅固」なる規定が、60年安保の街頭斗争が生産プロレタリアートをゆり動かす、組織化することに失敗したことを二重写しにされつ、全人民的政治斗争からの召喚と生産束主となるものを発生させ、今なお、無党派、社労同におかれは引き継がれているのである。のみならず、オ六回大会―マル戦派にあっても、労働組合の革命性、ソビエト論、あるいはゼネスト―革命論云々として、革命的な党内部においても今だ結着づけられないものとして現存しており、活動家組織としての労研、社研なるものは、かゝる状況に規定されてきたのである。

(二)

日韓、砂川以降、なかんずく10・8以降の階級斗争と活動家組織化の方向、街頭暴力斗争と、地域住民、地域労働者との結合（佐世保、王子、新宿）、地区反戦路線は、これらと根本的な相違を生み出してきた。長船社研も、エンズラ斗争の準備より、従来の産別一本から、地区反戦路線を採用し、三菱三原の組織の環を地区と定めた。大阪電通労研も、新しく形成された地方支部は中央―地区政治斗争を担う拠点としての位置づけのもとに、活動の型も活動家形成―組織化をこの一年間に大きくかめつけてきた。青年同盟の建設は、これらの階級斗争の概括にまかす、まず第一に階級斗争の相違変化から70年代階級斗争の展望、革命の型、党の型の規定、それらとちとづく党―先進的大衆の結合様式の新たなる時代を切り開くものとして設定されたのである。

このことは、まず第一に、10・8以降開始された70年代へむけての階級斗争が、凶暴凶内危機をめぐり、既存のマルジョフ政府の統治能力の圧倒的退却を以て、アジア派兵―ファシズムか、世帯革命―

口独次、以外にいかなる解決もない永続的政府を崩
壊した事、全人民がまさしくこの国家権力をめぐる
不連続の動搖と選択と政治過程への参加を強制せしめ
始めたこと、レーニンのいう武装蜂起へむけた全人
民的政治斗争、亦説理としてではなく実体として登場
し始めたことに規定されてゐる。ゆゑこの事は、8・

3説文において、帝国内の全面的な反革命戦争の
開始以前に革命情勢が登場すること、それは同時に
ファシズムが口独化の結着を、前段階であり同時に
的であり決着づけられない限り出兵できないことを確認
し、四中幸において、過渡期世界に規定された帝
国内の至清政策―EMF体制のことは、恐らく―
EMF解体、プロック化は一等には訪ずれず、フラ
ンス、イギリス、ドイツ、アメリカ等永続的危機且
つ内攻化するものと規定した。この事は、帝
国内の客観的危機の初まり―国家の幻想の崩壊
過程とアジア危機のベトナムから台湾、韓国への波
及の中で、70年代を見通しつつ、アジア勢力圏―統
制と清と、アジア派兵―日米共同軍事行動、ファシ
ズムの軍部独裁の問題が、三矢作戦、釜山赤嶺説、
中絶から極東安保、自行隊の治守出陣準備、あるいは
は食糧制―独禁―所得政策―軍事至清―大型合併と、
部分的であり或いは永続的なものとしてだけ認め、
最終的にはそれ以外には如何なる解決もないものと
してマルシヨア階級内部、大衆の中に提起せしめられ
たことを、労働者、大衆の不連続の動搖と分解を客観
的に強制し始めたことを意味してゐるのである。こ
のことは、エンズラ斗争（不均等発展と反革命体制
に対する混乱が、充分なる籠括を生み出してはな
い）とはいへ、エンズラへ上った大衆は単なる反米で
なく、極東の安保―国防に對して闘つたのだかゝに
おいて、枠組、帝国内の労働運動といわゆる民社、
公明の動搖が独自の政治参加は決して偶然なものと
してでなく、70年斗争から70年代階級斗争へむけ
ての、客観的危機を基底にした、軍事、国内政治に
對する二者択一的選択をめぐる政治の初まりの意味
してゐたのであり。それはゆゑは、EMFハテ口移
行―4・17スト―日韓の時代の、至清の勢力圏―産
業再編成をめぐるEMF・JC、同盟、至若土X勞
働運動の帝国内の労働運動の征覇は現在も進行し
つつも、未だより規定される、軍事、至若土―国家権
力をめぐる彼らの動搖は開始され、ますます深まる
ざるを得ないこと、全人民的政治斗争の条件、全階
級・全階級に對し、かゝる選択をつきつける条件が
成熟しつつあることの意味に徹するものがある。

一、第一先進的大衆を結合するものとして、たゞ
二、この武装蜂起をめぐる全人民的政治斗争の整理の

ら実体として召喚してゐたのは、並田―所得倍增
―八年口移行、日韓以前までの、全人民的政治斗争
―国家権力をめぐる全階級、階級を巻き込んだ動搖と
政治過程への参加の条件の右の意味での客観的不在
のことで、大衆、活動家自体が、取場の狭い枠に自
らとじこめられざるを得なかつたことに規定されて
いたのである。

勿論、この客観的に迫りつゝある選択を顕在化さ
せ、意識的、且つ物質力あるものとして、プロ独の
側に獲得してゆくのは、戦略であり、中央暴力斗争
―武装斗争と、地区、生産界における組織、宣伝で
ある。ゆゑこの事は過去をわすか一年の間に、安保攻
防の前段において、破防法洞鳴、事前検束、騒乱罪、
自行隊治守出陣準備、エスカレートする密策した
反革命を幾度も打破り、部分的で機動隊を粉碎し得
る地步に到達し、次の自行隊治守出陣を問題にする
地獄にまで到達した。10・8（11・12）における確立
した組織された暴力は、佐世保、王子、新宿、御堂
筋と藤方の大衆を戦斗性としてのみ、や平連、地評
青年部等第二戦線は、多説全プロレタリア、人民に
アジア派兵―ファシズムの方向性に対して、唯一斗
争部隊として公然と登場させ、一月以降の本格的な
解の攻防において、組織された暴力と群衆の關係を
組織された暴力、組織された圧倒的大衆による、全
プロレタリア人民の中央暴力斗争への基礎条件を打
算してきたのである。そして一日が10年に値するよ
うな、労働者、人民の政治過程の登場に對し、街頭
における戦斗と、地域―生産界における戦斗と組織
において、計画性と方向性を与へつゝ、党の旗を握
持するものとして、青年同盟と位置づけ

このように、青年部門が重要な位置を持つ
組織に付しては、そのフラットな構造を保持することは
ならず、階層的な組織は青年同盟に於いては必要では
ない。統一戦線は、現場レベルとしてのものである。
これとは別にそれ以外の条件となる。

亦五に、大衆闘争の前面に出るのが青年同盟となる
ことからして、党の青年同盟化を防ぐために中央、
都道府県、地区にわたる党指導の責任を分担するはから
なくてはならない。中央、都府県に於いては、統一戦線
／反戦フラット青年同盟の階層的中央指導体制を分
化し地区に於いては責任体制の確立を最低限の体制と
して確保する。反戦フラット青年同盟担当は、地区
労働者の階級分化、民間大企業、未組織の中小企業、
無業者に於いて最も顕著化している部分、あるいは階
級闘争の最先端の現場を地区に持ち込み、地区の大衆
闘争としてのタイナリズムを保障し、労力は、それ
を受けつつ、軌道作りをその任務とする。

(五)

川口に於いては、東田、若き屋の同志諸君と共に、来日
一日をめぐって青年同盟建設に關する討論を行い、
右の如き青年同盟の位置付けに對する基本的一致を
かちとつた。周知の如く、田中、エンズラに至る階級
闘争の成果は東西に於いては、中核に東京を組織
されることを許さざるを得ない。だが、この中で、
保守一歩闘争は、中央派力闘争としての母体闘争の
種をまらかにし、個別闘争と反スタブの内外の中核
、地帯と我々との向を動揺する解散派に對して、一
向より始まる激闘の全階級闘争を領導する我同盟の
位置と任務の書き留げられた。七回大会以降の地区
党の努力によって、我々が、地区反戦青年運動を牽
引し、且つ激闘の過程に於いて階級的影響力を拡大
し得る為の最低基盤を、単位を一向に作り、構築する準
備が遂げられてきた。東京に於いては、一向に作り
最低基盤を、各地に於ける我々の同志諸君を在るこ
と、地区党に於けるルンパロを含め、大衆的地区的反
戦運動成立、五つの取場サークル、大衆的軌道のア
ランを作りつつ、青年建設全代表者会議（11/13、
14）までにはオルケネ、組織的把握を明確にする
。南西に於いては、青年同盟の同盟化の問題を明確
にする。このこと、青年指導と階級指導の分化を地方委
、地区にわたってとりつつ、オルケネ、組織的把握
を行うてもらいたい。全国、各地区とも同様である。
中央に於ける青年準備は、同一志向と都道府県を
中心に行い、五月二十三日までに、規約、綱領の準備
、位置付け討論の集約、都の把握把握を各りつ
つ、五中全会の提案内容を準備する。

加 地方に於ける反戦担当、組織担当の責任者
の出席を要請する。
五月二十三日 五時、戦後社連絡
で、これは三月22日まで討論の中心内容
を中央に集約して欲しい。

三月二十三日は、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、28、29、30、31、

卿マッセンストライクから一月中央権力斗争の怒涛の進軍を勝ちとるであらう。

(十) 一月斗争に打ちつづく展望とスケジュールは次のとおり

○三月自衛隊演習阻止斗争

○三月(目標)党派、七〇年停保共斗会議設立

○四月、4・名国際反戦斗争を一月斗争につづく六九年国際統一行動第二波として斗う。

○4・28沖縄斗争を斗い

○5・1メーデーから五月斗争を、フランス五月革命一週年記念国際大斗争と連帯した停保降降斗争とし、

○六から七月斗争を、八月ASPRAC日本会議(京都)又は箱根または東京(紛争斗争へ連帯される)とす。

○秋の首相くA相の訪米阻止斗争へ連帯

210

一五七一